但し書つきであっても完全な誤りであろう。地方督撫層あるいは軍閥が、帝國主義の侵略と農民支配において果した歴史的役割をぬきにしてそれらを論ずることはできないと思う。

以上、近代史の専門家でもないわたしが、大變口はばったい批判を重ねてきて恐縮であるが、いくらか思想史に近いことをやってきた私自身に對する自己批判もふくめて忌憚ない意見を述べさせていただいた。思想史をやっていると、つい思想がひとり歩きをはじめ、西洋の近代が到達した地點から、西洋近代の論理でもって過去を再構成しようとする。しかし、しばしば思うことだけれども、たとえば、公私の分裂、内面的領域の確立、近代的自我の成立というようなことも、資本主義的機械制生産のもとで、人間疎外が進行し、形式的な民主々義の存在が、人々の政治的關心の領域を極限してきたヨーロッパ諸國と、半植民地、半封建的條件のもとで政治をぬきにしては個人が存在し得なかった中國とでは、近代的個人そのものの様相を異にするのは至極當然のことであろう。また、現在の中華人民共和國においては、公私の分裂ということは原理的に存在せず、公＝私として、またかくあることが個人の全面的な開花として考えられていると思う。そこではヨーロッパと異ったあらたな個人が生れつつあり、ヨーロッパにおける公私の分裂はもはや克服さるべき不幸な分裂として感じられているであろう。したがって中國の近代は、中國の現代に連續するものとして、現代はまた創造さるべき未來の究極的な價値――それはまた我々の創造しようとする未來にもかかわってくる問題であるが――に連らなるものとして把握されねばならないと思う。

私は今まで丸山眞男氏や野村浩一氏の論著から多くのものを學ばせていただいた。いわゆる中國學以外の分野からするこうしたアプローチは、中國學の分野においてきわめて貴重な意義をもっていたと思う。こうした思想史の方法論について私なりに檢討し批判する機會を與えていただいたわけだが、野村氏の「近代政治學」特有の用語と陰影に富む文章は、たえず私なりの推測をまじえて理解しなければならない點があって、あるいは論旨を誤解したところもあるのではないかと恐れている。御海容を乞う次第である。

（小野　和子）

中國における回教の傳來とその弘通　上下二卷

田坂興道著

昭和三十九年三月　東洋文庫
A5判　一七二六頁

本書の著者田坂興道氏は、昭和十四年東京帝大を卒業、ひきつづき東方文化學院にあって中國回教史の研究に從事され、その五ヶ年にわたる研鑽の成果は、昭和十八年、「支那に於ける回教の傳來と其の弘通」と題し、別篇「回回館譯語の研究」と共に同學院に提出された。爾來、著者並びに關係諸氏の、同書出版についての絶えざる希望と努力にもかかわらず、その出版は容易に實現を見ず、著者は不幸にも、去る昭和三十二年急逝せられた。その間、著者は右書を基にいくつかの論文を諸誌に發表されたが、同時に、綜合的な中國回教史を發表する用意のある事を、論文のはしはしに表明しておられたので、我々後進は、その發表の一日も早からん事を願い續け

ていた。幸にもこの希望は、昨年、關係諸氏の努力によって、ようやくにして滿たされ、ここにその内容を紹介できるに至った事を、まずよろこびたく思う。

本書は、上下二卷に分たれ、上卷には、著者遺影、故和田清博士の序、著者年譜及び著述目錄、昭和二十一年付の序言、凡例につづいて、〈序論〉序章、第一～第三章を收め、ついで〈本論〉に入り、第一～第三章において、唐代より元代に至る中國回教史の諸問題を時代別に論じ、下卷には、第四～第六の三章をついやして、明代における諸問題と、中國における回教文化の樣相が論ぜられ、最後に、〈結論〉、參考文獻要目、英文解說が付されている。

以下、本書の内容を紹介し、若干の感想を述べる事にしたいと思うが、なにぶんにも一七〇〇頁を越える怖るべき大著であり、またその論述は、きわめて多岐に渉るので、與えられた紙數の中で、逐一章をおってその内容を紹介する事は斷念せざるを得ない。從って、ここでは、本書の内容を筆者なりに整理し直して、著者が、中國回教史の研究にあたって、何を解明すべき問題と考えられ、また、それらの問題について、如何なる解答を用意されたかを、簡單に紹介するにとどめたい。

さて、まず第一に著者が問題にされたのが、「回教」なる名稱の由來であった。すなわち、この問題についての最も通俗的な說明は、回紇（ウイグル）族がイスラーム教を奉じたが故に、「回紇の宗教」の意味で「回教」なる名稱が生じたとするのであるが、著者は、回紇が奉じたのはマニ教であって、決してイスラーム教ではなかった事を明らかにして、この俗說の成立しえない事を明白にする一方、この回教とは、「回回の宗教」の意味であり、また「回回」とは、ウイグルを表す回紇・回鶻の轉聲語の一つとして、遼末に、カラ・ハーン（イレク・ハーン）國を指す種族的名稱として始めて用いられ、以後時代を經ると共に、回紇・回鶻とも混用されて、西方異民族の一般的呼稱である「西胡」ないし「諸色目」と同樣の廣い意味に用いられ、また彼等の多くがイスラーム教を奉じたが故に、およそ元の世祖の時代になって、イスラーム教徒の意味に限定されるに至ったとされている。この所說の内、「回回」なる語が、もともとはカラ・ハーン國のみを指す言葉であったとする見解は、確かに興味深いものであるが、なお「回回」なる語の用例を廣く諸史料より蒐集して、檢討する必要があるであろう。

この回教なる名稱についての所論は、本書全體の序論を爲すものであるが、ついで本論に入ると、著者は次の諸點の解明に意をそそがれたのである。

㈠回教の中國傳來の過程。

すなわち、七世紀の前半、アラビヤ半島におこったイスラーム教が、如何にして中國に傳來したかという問題である。この問題を解くにあたっては、(1)回教の中國傳來の時期、(2)回教本國についての中國人の知識、(3)中國周邊諸地域における回教の受容とその弘通の狀況、(4)右の諸地域と中國との交渉、の四點が主として考察の對象とされている。いうまでもなく、これらは、東西交渉史ないし中國周邊史の分野に屬する問題であり、一見中國回教史の研究とは關係が薄いかに思われるかも知れない。しかし、實は、この問題を大きくとり上げ、その解明につとめられた所に、從來の中國回教史とは異る本書の一大特色を見出し得る樣に思う。著者が、特にこれらの問題の解明につとめられたのは、中國の回教徒社會が、中國周邊の

回教社會よりする回教徒の流入と定着によって、徐々に形成されたとの見通しを持たれた結果であるが、この見通しが誤りないものである事は、何人も了承されるであろう。然らば、これらの問題について、著者は如何なる解答を示されたか、以下簡單に紹介する事にしよう。

まず、回教の中國傳來の時期については、隋開皇年間說をはじめとする諸說に、逐一檢討を加えられた結果、それらが、全て後世の作爲的說話にすぎず、史的事實としては到底承認出來ないものである事を明確にせられた。この著者の結論は、恐らくは正しいものであろうが、といって、著者自身がこれらに代る新しい年代を提示されたわけではない所に、この所論の弱點がひそんでいる。勿論、この問題は、もともと正確な年代を上げ得ない性質のものであるかとも思うが、尙問題は未解決のまま殘されている事に、注意する必要があろう。しかし、この回教傳來の時期に關する問題を扱う過程において、著者が、創建淸眞寺碑・大同城內淸眞寺・泉州淸眞寺・廣東懷聖寺の建置年代、また中國回教傳說にしばしばその名の見えるワッカース（Waqqās 斡葛思）なる人物の事蹟等について、明確な結論を出された事は、極めて有益であった。

次に、回教本國すなわちアラビヤ半島について、各時代の中國人が如何なる知識をもっていたかという問題であるが、これについては、唐代の中國人が、アラビヤ半島における新宗教の成立事情を如何に理解していたかという問題をはじめとして、宋・元・明の各時代における中國人の知識について論述された。しかし、限定された史料、特に旅行記等にみえる特定の中國人の知識をもって、一般の中國人の知識と考えてよいかは、若干問題のある所であるから、ここでは、明代に天方及びメッカが、西方淨土の理想境として把握される傾向が存したとする著者の指摘が、きわめて興味深いものである事を紹介するにとどめたい。

ついで、中國周邊諸地域の回教事情については、まず中央アジア、特に東トルキスターンについて、カラ・ハーン朝の時代に、カーシュガル・ホタンの一帶が回教化し、また當時イスラーム商人が、廣く蒙古方面にかけて活動した事を、特に西トルキスターンにおける回教事情に關連させて明らかにされたのを手始めに、ホーラズム王國及び元代東トルキスターンの回教事情を論じ、さらに進んでは東トルキスターンの回教化が、中國では明朝の時代にあたる東チャガタイ・ハーン國の時代に促進され、最後まで佛教的色彩の强かったトゥルファーンも、正統・景泰の交には回教化し、その趨勢は、以後ますます發展したと結論された。次に、東南アジアの回教事情については、ジャワ・ボルネオ・チャンパ・スマトラ、さらにインドにおける回教事情について考察され、イスラーム商人の進出や回教徒政權の成立を通じて、これらの地域に回教が發展した樣相を論述せられた。この中央アジア及び東南アジア諸地域における回教事情についての著者の研究は、大局的には正確な結論を導き出されている樣には思うが、細かい點になると、著者自身も認められている樣に、各時代各地域の專門家によって、より深く檢討される必要があろう。例えば、明代の東トルキスターンを扱った部分についていえば、根本史料である「ターリーヒ・ラシーディー」を全く利用されなかった爲に、モグーリスターン汗ユーヌスの子であるアフマッドを、スルターン・アリーの子とされたり、またこの地域に特長的にみられる回教の神祕主義的傾向についても、ほとんど論及

されていないのである。しかし、それにもかかわらず、新たにこれら諸地域の回教事情を研究する者にとっては、本書の記述が一つの出發點となり得るものである事は間違いない。

次に、中國周邊の回教圏諸地域と中國との交渉であるが、著者は、イスラーム勃興以前における兩者の交渉よりはじめて、唐・五代・宋（南宋は除く）・遼・金・元・明各王朝時代の交渉を順次論ぜられたが、中でも精彩を放つのは、宋・明兩朝時代についての記述である。すなわち、まず宋代については、從來カリフの名においてのみ行われていた所の西方よりの遣使來貢が、この時代になると、カリフのみならず、地方有力都市もしくは獨立的政權、航海貿易業者の手によって行われるに至った事實を、史料の鋭い分析を通じて明らかにされ、明代については、明實錄を史料に「回教諸國通好表　自洪武初至天啓末年」と題する通好表を作成され、何時、如何なる國（ないし人物）から、誰が、何の目的で來朝したかを一目瞭然たらしめ、この表の分析を通じて、明代には西方よりの入貢國數が八十七の多きにのぼったにもかかわらず、その入貢は主として永樂初年より天順初年に及ぶ五・六十年間に限られ、それ以後は急速に衰退するに至った事實を明白にされると同時に、この衰退が、中國的回教社會成立の爲の一つの大きな要素となっている事實にも言及された。さらに、「華夷譯語」の一種である「回回館譯語」にみえる來文と、「西域同文表」中の回回館表文を整理檢討され、これらの來文・表文の發遣者名、使者名、貢物、目的をやはり一表にまとめて提示されたのは、今後の研究に大きな便宜を與えるものといえる。さらに又、明實錄を基に、西方及び北方から、如何に多くの回教徒が、明朝に來歸し定住したかを、二つの表にまとめられ、成化の中頃をもって回教徒の來歸定住の現象が一段落し、それ以後は、中國回教徒社會に外來的要素が加わる機會が減少した事實を明らかにされた。著者苦心の賜であるこれらの諸表は、今後の我々の研究に大きく寄與するものである事は間違いないが、その基礎となった明實錄には、周知の如く、種々の寫本の系統があり、著者が表中に記載された人名・地名等の中には、他の寫本によって訂正すべきものが若干存在する事（例えば、一〇二六頁に二ケ所現われる亦速力火者王は亦迷力火者王）と、表の中には、その名からは回教徒とみなし難い者（例えば、一〇五七頁にみえる他力麻敏何禿、愛思着兒〈梁氏本では愛鬼着兒〉など）までも記載されている事に注意すべきであろう。なお又、著者は、蒙古地方より明朝に派遣された使節の中に、回教徒とみなされる者が如何に多いかについても、一表を作成されたが、著者が、故和田博士の研究を繼承して蒙古地方における回教徒の活動を明らかにされようと努力された事は敬服にたえない。しかし、これで問題が全て解決されたわけではなく、我々には、著者がほとんど利用されなかった蒙古史料ないしイスラーム史料を檢討する作業が殘されており、さらにまた、この問題の解明には、蒙古ラマ教史の研究が不可缺のものである事は申すまでもないであろう。以上で回教の中國傳來の過程に關する著者の所說の紹介をおわるが、要するに、この第一の問題についての著者の研究は、主として、西方ないし南方へのイスラーム教徒が、如何なる狀況の下に中國へ流入したかという、その狀況の解明に力をそそがれたものという事が出來よう。つぎに、第二の問題にうつろう。

(二)中國における回教發展の樣相。

すなわち、西方より傳來した回教が、中國內部において、如何な

る過程をへて社會史的・思想史的發展をとげたかという問題であるが、この問題については、(1)中國人の回教徒觀—漢回相互の關係、(2)歴代王朝の回教徒に對する態度、(3)回教徒の分布狀態、(4)回教徒の生活狀態、(5)中國回教文化の樣相の五點が主としてとりあげられている。特に、第一の問題については、著者も「中國における回教徒と非回教徒たる漢人との、所謂回漢對立は、單に現在における政治的・社會的重要問題であるのみではない。回教徒の過去の發展に際して常に相關係し、また將來もしかあるべき、中國回教徒社會の成長の上に、重大なる素因を提供してゐる。」と述べられた樣に、その解明は、中國的回教徒社會の實態を究明するに當って、不可缺のものとして把握されているのである。その結果、著者は、未だ回教徒のはなばなしい活動のみられない唐・五代の頃はともかくとして、宋代になると、回教徒の風俗・信仰は、中國人によって好事的に、その富豪奢侈は羨望の眼をもってみられるに至り、元代になると、その風俗は異端視され、その富豪ぶりは憎惡の對象とすらなって、ここに、今日まで繼續する漢回對立の根底が形成され、この傾向は明代に入ってもますます强く、社會一般の回教徒に對する反感の念は、もはや拔き難いものとなったと結論された。一方、回教徒の中國文化に對する態度については、回教徒の中には中國文化を攝取し、中國的教養を身につけた者もあるにはあったが、結局は、回教徒は中國文化に同化する事なく、またこの中國文化との非同化性・非融合性の故に、かくも長い年月に渉って、中國社會の中に特異な位置を占めつづけ得たのだと結論される。この著者の結論は、多くの西方傳來の諸宗教が、時代と共に中國文化に同化吸收されていった事實を思い浮べる時、確かに問題の核心をついたものとして理解出來るのであるが、この非融合性にもかかわらず、中國回教徒社會が、特に清朝以降、多くの漢人改宗者を獲得し得たのは何故か、という素朴な疑問は、なお未解決のまま殘されている事に注意したい。

次に、歴代王朝の回教徒に對する態度については、元朝時代、回教徒が所謂色目人の有力分子として特別の待遇を與えられた事は勿論であるが、といって他教徒に比して格別優遇されたわけではない事を强調され、また明朝時代については、國初における若干の例外を除いて、差別待遇を加えられたりはしなかった事を明らかにされている。これに關連して、朱元璋を回教徒とみなす說のある事に注意され、これに批判を加えられているのは興味深い。

ついで、回教徒が如何なる地域に分布していたかの問題であるが、まず唐代には、廣州や海南島を中心に、長安・揚州にも若干存在していた事を推定され、五代になっても、この狀況はあまり變化せず、特に南漢の首都となった廣州が回教徒の中心地であった事を明證され、また南漢の劉氏を回教徒とみなす見方に對し、その正しからざる事を指摘された。宋代にも、廣州・泉州・杭州等の沿岸地域が回教徒の中心地としての地位を保ちつづけたが、元代になると、「元時回回遍天下」といわれる如く、回教徒は甘肅・陝西・京包線沿線・雲南・福建・江浙及び直隷等の廣い地域に分布定着し、明代には、甘肅・寧夏・陝西・河北・山東・河南・江蘇・浙江・福建・廣東・雲南の諸地域に分布し、單に大都會のみならず、邊鄙な地方の都邑にも回教徒が進出定着した事實に注意された。

次に、回教徒の生活狀態については、まず唐より宋に至る時代、回教徒が都市内の一定の地域、すなわち蕃坊等に居住して、自治的

な共同體を構成し、治外法權的な自由と、植民地的生活樣式を維持しつづけた事を明らかにされ、回教徒の中には、その商業活動によって獲得した富をもって、公共事業（城の修理・學校の建設等）に參加する者もあった事實にも論及され、從來の桑原隲藏博士等による研究を一歩前進させておられる。ついで、元代になっても、右の狀態はあまり變化を見せなかったが、明代になると、宋・元時代の如く、政治的・經濟的に巨大な權力をふるう者が稀になると同時に、その社會がむしろ困窮の樣相を呈し始めている事實と、從來大都市内の一定區域にのみ居住していた回教徒が、諸地方に分散して、中國人社會と密接な關係をもつに至った事實を、特に、外來回教徒に多くみられる漢姓漢名の採用、漢人婦女子との雜婚、さらには回教徒流賊の發生等に關する詳細な檢討を通じて明らかにされ、さらには、「李自成は回教徒か」という問題についても一つの結論を出されている。この明代回教徒社會を研究した部分は、本書の中でも特に優れた着想に滿ち、教えられる所が多い。

最後に、中國回教史の文化史的な諸問題についてであるが、この問題については、本書の第五章「中國的回教教學の勃興」、第六章「中國における回教文化」の二章が、專らその論述にあてられている。すなわち、第五章では、まず第一に、中國に傳來した回教が、ペルシャ的色彩の強いものであった事を、回教用語ないし回教文獻の分析を通じて明らかにされ、ついで、回教徒の中には時代と共に中國的教養を身につけ、回教を儒教思想で解釋せんとする傾向が現われはじめた事に注意され、明末、王岱輿、張中、馬明龍らによって漢文で書かれた回教教典の解釋書、典禮の指針書が出現した事を紹介され、これを中國的回教教學と名付けられた。この中國的回教教學についての著者の研究は、やや書誌學的傾向が強く、思想史の立場からの檢討は今後に殘されているといわねばならない。次に第六章では、中國に傳來した回教文化を、飲食物・象棊雙陸・音樂等について個別的に概觀された後、特に重要とみられる天文曆法關係については、まず「元史」天文志にみえる西域儀象について、つぎに「元祕書監志」にみえる西域の文獻及び儀器について、それぞれ原語名への復原に努力された後、所謂「回回曆法」の性格と、「回回天文書」について檢討され、前者が、純然たる回教曆ではなく、イランの曆法やその名辭をあわせ用いたものである事、また後者が、天文學よりも占星學をその内容とするものである事を述べられ、最後に、回回曆法が、ヨーロッパ文明の東漸と共に、西洋曆法にその地位をゆずった事情を明らかにせられた。

以上の諸問題を總括して、著者は、中國的回教社會の成立期を明代後葉に求め、この時迄に形成された中國的回教社會は、清朝時代に入ってもその本質をかえる事なく、惰性的・繼續的に存在しつづけたと結論されたのである。

これをもって、本書の紹介を終りたいと思うが、尙他に氣のついた點をあげると、回教徒人名のアラビヤ語ないしペルシャ語への轉寫に若干納得出來ないもののみられる事と、またこれら回教徒的な名前をもった者が、全て回教徒としての生活を送っていたかどうかについても、尙檢討の餘地が殘されているのではないかと思う。卷末の參考文獻要目は、相當完備したものの樣ではあるが、尙詳しくは、渡邊宏編「イスラム記事目錄—著者別—」（一九六一年、編者油印）、Index Islamicus (1906～1955), ed. by J.D. Pearson, Cambridge, 1958. Supplement to the Index Islamicus (1956

〜1960), Cambridge, 1962. 等によって補う必要があろう。また、本書に索引が附せられなかった事は殘念であった。なお、最初におことわりした如く、本稿では、一々の章節ごとに内容を紹介する事が出來なかったので、次に示す〈本論〉の目次（節はさらに項に分れるが、ここでは省略する）を參照して、論述の所在箇所を推定していただければ幸である。

第一章　回教の中國傳來に關する諸説とその批判
第一節　隋開皇年間説、第二節　隋大業年間説、第三節　唐武德年間説、第四節　唐貞觀二年説、第五節　唐貞觀六年説、第六節　唐永徽二年説及び結論
第二章　唐宋時代の中國における回教徒
第一節　唐宋人の「大食」に關する知識と當時の南海地方における回教徒の活動　第二節　唐宋時代の中國に往來在留せる回教徒、第三節　唐代の回紇の宗教は回教にあらず、第四節　疏勒及び于闐地方の回教化
第三章　元朝治下における中國の回教徒
第一節　蒙古族の勃興と回教徒、第二節　元朝治下の中國における回教徒の分布、第三節　被治者としての回教徒—蒙古主權と回教徒との關係、第四節　元代における回教徒と漢人との關係
第四章　中國的回教徒社會の成立
第一節　元明鼎革の回教徒に及ぼした影響と明代漢人の回教徒に對する態度、第二節　明朝と回教徒との交渉—特に回教徒の中國への移住、第三節　回教徒の發展と中國的回教社會の成立
第五章　中國的回教教學の勃興
第一節　中國へ傳來せる回教の特色　第二節　中國回教教學勃興の基礎、第三節　明末における中國回教教學の勃興
第六章　中國における回教文化
第一節　中國における回教文化の綜觀、第二節　札馬剌丁の西域儀象、第三節　「元秘書監志」に見える西域の文獻及び儀器、第四節　回回曆法と回回天文書　第五節　歐洲文明の東漸と回回曆法の運命

ともかく、本書が、我國における中國イスラーム社會研究史上に、不滅の地位を占め得るものである事は間違いない。しかし、本書の記述が明代をもって終っている以上、綜合的な中國回教史は、清代回教史の研究をまってはじめて達成されるものといわねばならない。それにつけても、我國における中國回教史研究が、わずかに中田吉信氏ら二、三の篤學の士によってのみしか行われていない現狀は、まことに殘念に思われてならない。勿論、中國回教史の研究には、漢文史料の讀解力はもとより、イスラーム學一般についての知識、アラビヤ語・ペルシャ語の基礎的知識が不可缺のものであるからには、相當の困難を伴うものである事は否定すべくもないが、本書の出版を機に、新しい研究者が續々登場して、我々に新らしい知見を加えられん事を切に希望する。

いたらぬ紹介に終った事を讀者の諸氏にお詫びすると共に、著者の御冥福を祈りつつ筆をおく。

（間野　英二）